

文芸

俳句

熱燗や我に過ぎたる友のみて 池田 逸子
 露の臺上総台地の風の中 伊藤 敬子
 ひな祭り會孫の一人女の子 伊藤 定男
 生命いのち咲く胎児の心脈雨水かな 今関満喜子
 足跡も足音も消す春の雪 魚地 照子
 薄氷のまだ解けかぬる日差しかな 江森 悦子
 暖かき日差を受けて雛収め 大谷 武彦
 菖椿わたしの過去は燃えてゐた 川島 孝夫
 青畳女系家族の雛の宴 川島 通則
 末里野の川のうねりの右左 向後 寛
 黄昏れてなを明るさやひな祭り 越川 義則
 錦松岩とだき締め春を待つ 小松 藤男
 渡し舟土手の小径の露の臺 佐瀬 輝夫

用水路春の音してきらめけり 宍倉 道子
 腕白がチラリと覗むお白酒 鈴木とし子
 下萌や座して勞務者眠り居り 玉虫 栗扇

春宵や月の砂漠の御宿へ 戸村 静菴
 春一番帽子を飛ばし行きにけり 早川 勇

短歌

就職の手紙ありと喜ぶ子 不安は言えず祈る採用 越川 福子
 ウインドに吾が写りふけおれば 思わず伸ばす背筋や腰を 高梨 キヨ
 大空に全てとせし戦友ありき 彼の魂今何処にありや 鈴木 益郎
 鮮やかにクロッカスの花黄に咲きて 春のさ庭の光おだしむ 佐瀬 初音
 娘らふたり来れば吾が部屋片付けて 何が何処やら行方くらます 吉岡 信子
 活け置きしハツ頭の芽はつんつんと 土と穿うがらて春と告げぬつ 青木 秀子

ハイチにて大地震あり人人が 苦しみをらむ被災地思ふ 平山 芳子
 立金花のつやもつ黄花香さば多に咲き 春の日うけて庭にかがやく 池田 春江

今年より作付けするらし葦焼かれ 耕されたる土の艶めく 押尾 輝子
 平成の記念に貰ひし紅梅の 二十二年経て幹の太くしも 田崎 尚美

畑の辺に鳥避けの黒きビニールが 鴉思はせ風に揺れぬつ 芹川 初子

夕つ日は雲と苗の色に染め 自ら一日を納めゆくなり 西山満里子

眠れずにいくとも見やる柱時計 午前三時と針は指しぬつ 八角 三枝

銭箱に硬貨といくつか投げ入れて 無人売り場の野菜を買いひぬ 鈴木まさ子
 鈴ゆゑに趣味の狩猟を辞めし父 今日解禁日黙しつづける 島田ますみ

平成の二十二年二月二十二日二時 短歌の友が電話くださる 斉藤つね子

こうほう博物館 25

中世の輸入陶磁器

平成五年から九年まで発掘調査された篠本城跡からは、城が営まれていた当時、使われていた陶磁器が多数出土しました。陶磁器は高価なものでは中国から輸入された磁器から、国内の産地で焼かれた陶器、城の近くで作られた安い土器まで、様々な種類の焼き物がありました。今回はその中で最も高価であった輸入磁器のひとつを紹介しましょう。

写真の器は、外側の面に浮き彫りのように、ハスの花弁をあしらった文様をつけた碗で、内外面全体に青緑色の釉をかけて美しい色をしています。ここから、青磁蓮弁文碗と呼ばれています。大きさは口径11cm、高さが4.5cmと小ぶりの碗ですが、その美しさから当時は貴重に扱われていたと思われます。

青磁と呼ばれる焼き物は、中国の唐代から明代まで、中国の各地で生産されました。特に中国中南部浙江省の山の中にある龍泉という町を中心に焼かれた物産地では、三百ヶ所に上る窯場があつて、碗のほか壺や皿など大きなものまで、盛んに青磁が生産され、その多くは日本に輸出されたそうです。篠本城跡で出土した青磁の器は、そうしたものの一部です。出土した青磁のほとんどは破片や欠けたものですが、その多さは県内でも上位になり、ここに豊かな経済力を有した武士団が住んでいたことを示しています。



▲篠本城跡から発掘された青磁蓮弁文碗